

【コメント】「王制・カリフ制・スルターン制」へのコメント

著者	佐藤 次高
雑誌名	公家と武家 その比較文明史的研究
巻	22
ページ	131-135
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	Comment
URL	http://doi.org/10.15055/00002818

【コメント】

「王制・カリフ制・スルターン制」へのコメント

佐藤 次高

早稲田大学

ラーフェク氏の報告は19-20世紀を主たる対象にしているので、私は歴史をさかのぼってイスラーム史のなかの王制・カリフ制・スルターン制を検討し、1920年のシリアでなぜ王制が選択されたかを考えてみることにしたい。

1. カリフ権の性格

632年、メディナで預言者ムハンマドが没した後、ムハージルーン（メッカからの移住者たち）とアンサール（メディナの援助者たち）との合議によって、ムハンマドの古くからの友人であり、かつクライシュ族の長老でもあるアブー・バクル（在位632-634年）が初代カリフに選出された。預言者は宗教的権限（*dīn*）と政治的権限（*mulk*）とを併せ持っていたが、アブー・バクルは両者のうち政治的権限だけを継承したのである。したがって、この点に着目すれば、カリフ権の本質は後の大アミールやスルターンと同じく「王権」であったことになる。

つまり歴代のカリフには、神の言葉を預かる預言者の資質はなく、またその啓示にもとづいて人間の行為を裁く権限も与えられていなかった。コーランやハディース（預言者の言行を伝える伝承）にもとづいてイスラーム法（*sharī‘a*）が体系化されるのは9世紀頃のことであるが、この体系化を行ったのはカリフやその側近ではなく、イスラーム諸学に通じた知識人たち（‘*ulamā*’）であったことに注意しなければならない。いいかえれば、イスラームでは、カリフが行使する軍事・行政権とウラマーの立法・司法権とは、当初から明確に区別されていたのである。

ところでカリフには、その権限や性格をあらわす、次のような3つの称号があった。すなわち

- (1) ハリーファ・ラスール・アッラーフ (*khalīfa rasūl Allāh*)
- (2) アミール・アルムーミニーン (*amīr al-mu‘minīn*)
- (3) イマーム (*imām*)

がそれである。

(1) は「神の使徒の後継者あるいは代理」の意味であり、このハリーファの英語訳がカリフ (*caliph*) であることはよく知られている。この用法に従えば、第2代目のカリフは、「神の使徒の後継者の後継者」(ハリーファ・ハリーファ・ラスール・アッラーフ) と呼ばれることになるが、これでは煩わしいのでハリーファと略称されたのである。なお、ハリーファ・ラスール・アッラーフのラスールを省略し、カリフを直接「神の代理」とするハリーファ・アッラーフの称号も早くから用いられたが、このカリフ権神授の思想が多くの人によって認知されるのは、アッバース朝（750-1258年）時代になってからのことであった。

(2)は「信徒たちの長」の意味であり、ムスリム軍を率いて異教徒と戦う勇ましい軍司令官の称号であった。これは、聖戦(ジハード)としての大征服を推進した、第2代カリフ・ウマル(在位634-644年)がはじめて採用した称号である。一般にイスラーム国家の首長といえ、私たちはまずカリフ(ハリーファ)を思い浮かべるが、実際の歴史のなかでもっともよく使われたのは、ハリーファではなく、アミール・アルムーミニーン(信徒たちの長)という勇ましい称号であった。

(3)のイマームは「礼拝の指導者」を意味するアラビア語である。各地のモスクで礼拝の指導に当たる人物もイマームと呼ばれるが、カリフがイマームとも呼ばれたのは、あくまでもムスリム全体の信仰生活を指導するという象徴的な意味においてであった。それ故、これをもってカリフにも「宗教的な権限」が備わっていると考えるのは、カリフ制の理解に混乱をもたらすもとであろう。なお、シーア派ムスリムの最高指導者もイマームと呼ばれるが、シーア派のイマームはムハンマドの娘婿アリーの血統をひき、教義の決定権と立法権をもつばかりでなく、その判断は絶対に不可謬であるとされていたことが特徴である。

2. カリフ権の承認

アブー・バクルが初代カリフに選出されたとき、メディナのムスリムたちは、ひとりひとりアブー・バクルに対してその権威を承認するバイア(bay‘a)、つまり「忠誠の誓い」を行った。もともとバイアとは、商取引が成立したとき、双方の商人が互いに手を打ち合わせるアラブの古い習慣を意味していた。これが、ムハンマドの死を契機に、その後継者の権威の承認に用いられたのである。これ以後、バイアは新しく即位したカリフやスルターンを承認する、モスクでの一般的儀式としてイスラーム世界に広く定着していく。イブン・ハルドゥーン(1332-1406年)は、『歴史序説』のなかで、「現在一般に行われているバイアは、地面に口づけしたり、あるいは王の手や足や衣服の下縁に口づけしたりするペルシアの宮廷風の挨拶である」(森本公誠訳、416頁、一部改訳)と説明している。ここには、モスクでムスリムが集団で行うバイアに関する説明はないが、イスラーム世界の拡大につれて、忠誠の誓い(バイア)も個人的な握手の形式から、集団による儀礼へと変化していったのであろう。

バイアによってムスリムの合意をえた新カリフに対して、その後もムスリム住民による定期的な合意の儀式がくりかえされた。毎週、金曜日正午に行われる集団礼拝時の講話(khutba)がそれである。説教壇(ミンバル)で語られるフトバのテーマは様々であるが、どの講話でも最後に「このフトバをカリフ某の名において読む」という締めくくりの言葉が語られた。これは、初期イスラーム時代のカリフが自ら説教壇に立ってフトバを行った名残であるが、いずれにせよ、金曜モスクを共有する地域住民たちは、説教者(ハティーブ)によるこのフトバを通じて、1週間に1度、彼らの支配者が誰であるかを確認してきたのである。住民の間で現在の支配者を否定する合意ができれば、「フトバからカリフの名を削除する」ことも行われた。いいかえれば、フトバから支配者の名を削ることは、地域住民が反乱を起こしたことを公に表明する手段であったといえよう。

以上のように、新カリフの承認と正当化はバイアとそれに続くフトバによって行われ、これ

らを実行するムスリムの集合体がイスラーム国家（dawla）の核心部分を形成した。したがってイスラーム国家は、国境が固定された領域国家とは異なる原理のうえに成り立っていたことになる。現実の歴史のなかでは、バイアが信者の自由意志ではなく、支配者側からの強制によって行われることもあったに違いない。また、フトバからカリフの名を削れば、これは反乱の表明であったから、地域の住民はとうぜん政府による弾圧の対象となった。

しかしバイアやフトバというイスラームに固有な慣行のなかには、ムスリム住民の意向がなんらかの形で反映されていたことが重要であろう。これに対して、たとえばエジプト古王国のファラオは、「太陽神ラーの子」として神性をもつ絶大な権力者とされ、帝国内の住民にはこの王権を否定する権限は与えられていなかった。またアケメネス朝のシャーハーンシャーは、「神とほぼ同等の権威」をもち、その権力は絶対的であった。したがって宗教的な権限のないイスラームのカリフ権は、古代オリエントのファラオやシャーとは異なる、新しい政治原理にもとづく王権であったとみなすことができよう。

3. カリフ・スルタン体制の成立

9世紀に入るとアッバース朝の領域内では、イラン東部のターヒル朝（821-873年）とサッフアール朝（867-903年）、エジプトのトゥールーン朝（868-905年）など、バグダードのカリフ権を否定する独立王朝があい次いで樹立された。これによってアッバース朝カリフの権威がおよぶ範囲は縮小し、国庫収入もいちじるしく減少した。また軍隊の中核を形成していたホラーサーン軍は、世代交代が行われた結果、カリフへの忠誠心を失いはじめた。これを補うために採用された奴隷のマムルーク軍団も、しだいに勢力を蓄えると、カリフの統制下から離反する傾向をみせはじめ、やがて彼らの主人であるカリフの改廃にまで介入するようになった。

このような状況のもとで、936年、カリフはバスラ総督のイブン・ラーイクを大アミール（amīr al-umārā）に抜擢し、軍隊の指揮権と徴税権をゆだねると共に、全国のモスクでカリフと大アミールの名が唱えられるよう命令を発した。「モスクで名を唱える」とは、むろん金曜日のフトバにその名前を入れることを意味している。カリフが軍事指揮権と徴税権にくわえて、フトバの権利をも第三者に譲渡したのは、イスラーム史上これがはじめてのことであった。

946年、バグダードに入城したブワイフ家のアフマドも、同じくカリフによって大アミールに任じられ、ムイッズ・アッダウラ（「王朝の強化者」の意味）の尊称（ラカブ）を与えられた。イラン系のブワイフ朝（932-1062年）はザイド派を奉ずるシーア派政権であったから、ここに軍事力をもつシーア派の君主がスンナ派のアッバース朝カリフを保護するという、奇妙な協力関係が成立することになった。シーア派の知識人ビールーニー（973-1050年）は、このような事態の出現を次のように記している。「国家（ダウラ）と王権（ムルク）は、アッバース家からブワイフ家に移行した。アッバース家に残されたのは宗教的な権限（ディーーン）だけである」。先に述べたように、この場合の「宗教的な権限」とは、もちろん預言者ムハンマドがもっていたような宗教的権限ではなく、モスクでの礼拝やメッカ巡礼など、宗教的な諸行事を司る象徴的な権限をさして用いられていることは明らかである。

1055年、ブワイフ朝に代わってスンナ派のセルジューク朝政権がバグダード入城すると、カリフはその首長トゥグリル・ベクに「名誉のローブ」(ヒルア)を与え、全国のモスクでは「東西世界のスルターン (sultān)」の名が唱えられた。つまりセルジューク朝(1038-1194年)のバグダード入城を機に、アッバース朝カリフがスルターンの支配に正当性を与え、スルターンはカリフの地位を保護する新しい政治体制、つまりカリフ・スルターン体制が成立したのである。

4. カリフ制・スルターン制とイスラーム法

9世紀頃までに整備されたイスラーム法(シャリーア)は、ムスリムとしての正しい生き方を示す指針である。ただシャリーアの著しい特徴は、シャーフイー派、ハナフィー派、マリック派、ハンバル派など、法学派ごとに独自の法体系があり、しかも国内ではこれら複数の法体系が容認され、実際に機能していたことである。つまり一つの国家に一つのイスラーム法が適用されるのではなかったことに注意しなければならない。たとえばオスマン朝(1299-1922年)では、支配者のオスマン家はハナフィー派を王朝の法学派として公認したが、支配下のシリアやエジプトでは、他の法学派に属するムスリムが多数おり、各学派の法律による裁判が行われた。いずれにせよ、カリフにはイスラーム法にもとづいて統治する義務と権限があり、大アミールやスルターンはカリフからイスラーム法施行の権限を譲り受けて統治に当たったのである。

ハナフィー派の法学者アブー・ユースフ(731頃-798年)は、『租税の書』の冒頭で次のように述べる。「信徒の長(カリフ、ハールーン・アッラシード)は、私に1冊の総合的な書物を執筆するように求められた。それは、カリフがこの書によって地租(ハラージュ)、十分の一税(ウシュル)、喜捨(サダカ)、人頭税(ジャワーリー)を徴収し、またそれに必要な監督と業務を行うためである。カリフはこれによって臣民にふりかかる不正を取り除き、彼らに福利(maslahah)をもたらすことを望まれたのである」。これによれば、カリフによる統治の目的は、イスラーム法に規定された税を徴収し、正しい政治を行うことによって、臣民に福利をもたらすことにおかれていた。

このようにカリフ政治の本質はイスラーム法の施行による公益(マスラハ)の実現にあり、カリフから政権を譲渡された大アミールやスルターンには、カリフに代わってこの種の政治を実行することが求められた。言い換えれば、イスラーム法を執行する主体であるカリフからその権限を譲渡されることによって、大アミールやスルターンの地位は正当化されたことになる。カリフが実権を失ってからもおスナ派ムスリムの象徴として存続したのは、現実の王権を正当化するうえでカリフの存在が不可欠だったからである。1258年、モンゴル軍のバグダード攻略によってアッバース朝のカリフ体制は消滅したが、1261年、マムルーク朝(1250-1517年)の第5代スルターン・バイバルス(在位1260-77年)は、アッバース家のカリフをカイロに擁立した。カイロのカリフ制は16世紀初頭まで存続するが、これも、スルターン権力を正当化するうえで、アッバース家の血をひくカリフの存在が有効だとみなされたからである。

王、カリフもしくはスルターン—1920年、シリアはなぜ王政を選んだのか？

以上のように、カリフ制にせよ、スルターン制にせよ、イスラーム法にもとづく政治を基本にしていた。したがって、1920年に、もしカリフ制あるいはスルターン制を選択したとすれば、人々は当然イスラーム法にもとづく政治を思い浮かべたはずである。しかし当時の政治状況は、このような伝統的な統治形態ではなく、西欧流の近代法にもとづく複合的な民族国家の樹立に傾いていた。こうみてくれば、20世紀初頭に、カリフ制でもなく、スルターン制でもなく、王制が選択されたのはいわば当然の結果であったともいえよう。

<参考文献>

日本イスラーム協会監修『新イスラーム事典』平凡社、2002年

イブン・ハルドゥーン（森本公誠訳）『歴史序説』全3巻、岩波書店、1979-87年

佐藤次高「イスラーム国家論—成立としくみと展開—」『岩波講座 世界歴史』10、1999年、3-68頁

——「イスラームの国家と王権」『岩波講座 天皇と王権を考える』1、岩波書店、2002年、235-255頁

嶋田襄平『イスラームの国家と社会』岩波書店、1977年

湯川 武編『イスラーム国家の理念と現実』栄光教育文化研究所、1995年

ローゼンタール（福島保夫訳）『中世イスラームの政治思想』みすず書房、1971年

Abū Yūsuf, *Kitāb al-Kharāj*, English tr. by A. Ben Shemesh, *Taxation in Islam*, vol. 3, Leiden, 1969

Arnold, Th., *The Caliphate*, London, 1924

al-Azmeh, A., *Muslim Kingship*, London, 1997

Berkey, J. P., *Popular Preaching and Religious Authority in the Medieval Islamic Near East*, Seattle, 2001

Black, A., *The History of Islamic Political Thought*, Edinburgh, 2001

Crone, P. and M. Hinds, *God's Caliph*, Cambridge, 1986

Lambton, A. K. S., *State and Government in Medieval Islam*, London, 1981

Mottahedeh, R. P., *Loyalty and Leadership in an Early Islamic Society*, Princeton, 1980